

いる。看護は女性が担う仕事であるとしてきた伝統的な考えにも、変化が出てきているといえる。

女性修験者とライフコース

——「在家」宗教者の葛藤と克服——

小林 奈央子

近年、日本の仏教界においては、既成仏教団の男性中心の権威構造を脱中心化し、教団内の性差別を自らの問題として、異議申し立てや改革運動を行う女性たちが出てきている。そして、こうした女性たちの積極的な活動の背景には、既成仏教団が、女性僧侶、僧侶の配偶者、女性信者など、教団内の女性たちを、教義と制度の両方において下位に位置づけてきたという事実が存在している(川橋範子「現代日本の仏教とジェンダー」二〇一一)。これは言い換えれば、女性たち自らに、異議申し立てや改革運動を惹起させるような、「可視的」な性差別が長く既成仏教団内にあったからと考えられる。

では、修験道および山岳信仰系教団における女性たちについてはどうか。いまのところ、既成仏教団で見られるような、教団内部の女性による改革運動は見られない。むしろ、だからといって修験道・山岳信仰系教団にジェンダーの不均衡による問題が存在していないわけではない。問題は存在するものの、それが未だ「個人的な問題」とみなされ、公の議論の場には上っていないだけなのである。そして、こうした状況を

引き起こす要因は、修験道・山岳信仰系教団特有の、歴史的背景、活動形態の特徴にあると考えられる。

まず、歴史的背景については、山岳における女人結界の歴史が長く続いていた上、結界の解除と同時期に、神仏分離により修験道教団や修験道文化そのものが途絶・壊敗するという不遇を経験していることである。そのため教団への女性の本格的な参入も、教団が再び「修験」として独立した戦後以降のことである。これはつまり、女性が教団組織に加わってからの歴史がまだ浅いということである。また、活動形態の特徴としては、まず一つに、修験者の大半が、信仰とは別に生業をもち、「在家」宗教者として個別に活動していることである。そのため、既成仏教団と寺院との関係ほど、修験者の日常生活や経済活動は、教団の在り方と密接に結びついていない。もう一つは、教団発行の宗教者資格の高低よりもむしろ、修験者個人の法力の高さ、すなわち実力によって信者が集まる傾向があるということである。そのため、高い法力を有することによって多数の信者を集め、組織の代表となる女性修験者も存在している。

以上のような、修験道・山岳信仰系教団の歴史的背景や活動形態の特徴が、ジェンダーに関わる問題がありつつもジェンダー平等を目指す動きにつながらない要因となっていると考えられる。とりわけ、一握りの傑出した女性修験者の存在は、「修験道は女性に開かれている」という誤った印象を与え、かえってそれ以外の性差別やジェンダーの問題を不可視にしてきた面がある。近年は特に「在家」宗教者であるがゆえに、家庭やライフコースに関わる葛藤を抱えている若い女性修験者が多くな

っている。中には、配偶者からのDVなど深刻な問題も含まれているにもかかわらず、こうした問題や悩みを、「行者ゆえに行を積まされている」と宗教的に解釈し、独力で克服しようとする女性が少なくない。そして、それがゆえに問題がいつまでも「個人的な問題」の範疇を出ず、表面化してこないのである。これは、女性下位という可視的な性差別に対し、差別の経験を共有しつつ、協同して改革を進めている既成仏教教団の女性の在り方とは随分異なっている。

昨今は、女性修験者とジェンダーという直ちに「大峰山女人禁制問題」がその最たるものとして取り上げられ、先鋭化の動きを見せている。しかし、修験道教団には、この問題以外にも数多くのジェンダーをめぐる問題が存在しており、未だそれが教団全体に関わる、組織的・構造的な問題として認知されていない面がある。大峰山の問題についても、そうした諸問題に計慮しながら、より広い視点から考察を進めていく必要があるだろう。

パネルの主旨とまとめ

小林 奈央子

本パネルでは、伝統的な宗教教義、あるいは宗教的規範と、新たに獲得された近代的な思考や社会制度などとのはざまにおいて、宗教的権威から周辺化されがちな女性たちが「伝統」と「近代」との間で生じる葛藤をどのように受け止め、克服して

いるのかを、ジェンダーの視座を通して明らかにすることを主題とした。そして特に、就業、結婚、出産など女性のライフイベントとその折々で立ち現れる宗教との関わりに着目し、女性たちが「伝統」か「近代」かの二者択一的な選択をするのではなく、その両者を行き来しながら、双方をつなぐような重層的で複合的な選択をしている実態について、四人の発表者が、それぞれの調査フィールドを事例に報告をおこなった。近代が伝統を凌駕・変革していく、あるいは逆に、近代に抗って伝統的なものが呼び戻されるというような一方方向ではなく、女性たちが「伝統」と「近代」の間を往還しながら、単なる両者の相克を超えた多様な選択をしている様相を明らかにすることを本パネルの主題とした。

その点でいえば、中国雲南省西双版纳タイ族の出産を取り上げ、近代医療が浸透する中でも、女性たちが伝統的な出産のあり方や知識を適宜利用し、「伝統」と「近代」の枠組みをゆさぶるような実践をしている点に着目した磯部報告は、本パネルの趣旨を最もよく反映したものであったと思われる。コメントータの黒木雅子氏も、出産に影響する知識体系が男性中心的な上座仏教から近代的な知識体系に移行しても、女性の周位的位置づけにかわりはないが、「しかし、そこで、女性たちがこの二つの知識体系を行き来しながら、状況や必要に応じて主体的に出産方法を選択している」ということは、伝統宗教と近代の知を利用しながら生き延びる弱者の智慧として興味深い」との評を寄せられた。このように女性たち自身の選択が、従来の社会の在り方に変化をもたらしている事例に対し、他方、社会の変